

# 彩られる物語、受け継がれる物語

## カンボジア怪奇映画に見る「アープ」の伝承

岡田 知子

### はじめに

カンボジアには「アープ」とよばれる女性にまつわる伝承がある。「アープ」である女性は、夜になると、内臓のつながった頭部が胴体から抜ける。そして、汚物や動物の内臓や死体を食べようと、低空を浮遊する。首からぶら下がっている一連の内臓の胆のうあたりが、緑色にちらちら光って見える、という視覚的表現がされる。

アープのイメージと物語は、時代とともに少しずつ彩られながら、カンボジアの人々の中で豊かに受け継がれてきた。

本稿では<sup>1)</sup>、アープに関するこれまでの言説を整理し、それを踏まえて、1990年代に制作された、カンボジア映画史上初のアープ映画と考えられる『我が子よ、母はアープ』を取り上げる。『我が子よ、母はアープ』については、作品名は一部のカンボジアの人々には知られているものの、特に注目されることはなかった。本稿では、同作品の正確な制作時期、内容について記述し、制作された時代背景に留意しながら、そこで描かれるアープの表象と物語を中心に検討する。またその後には制作されたアープ映画作品を概観する。

1) 1960年代から1975年までのカンボジア映画に関する情報は映画評論家のフイ・ワタナ氏の運営するサイト the Golden Age of Cambodian Cinema (<http://golden-age-of-khmer-cinema.eklablog.com/>)および同氏の著書 *កង្វះសតវត្ស កង្វះជំនុំទេ!* (2020)、また私信によるところが大きい。同氏はドキュメンタリー『ゴールデン・スランパーズ』(ダヴィ・チュウ、2011)の制作に多大な貢献をした。同氏のプロフィールについては <http://golden-age-of-khmer-cinema.eklablog.com/accueil-c246056>(最終閲覧日2020年1月9日)を参照。有益な情報を提供してくださった同氏に感謝の意を表す。

Acknowledgements: The author would like to thank Mr. Huy Vathana for the valuable information he shared on Cambodian films in 1960's and 1970's in his website. He was very accommodating and quick in responding to my inquiries regarding the subject matter. I'm grateful for his generosity in sending me a draft copy of his book about Cambodian films which will soon be published (as of this writing).

### 1 アープを巡る物語

#### 1-1 語り継がれてきた物語

アープは現在でもリアリティをもって語り継がれている。ミアチ [1999] や井伊 [2008] では、カンボジア各地の人々の語りを紹介されている。

ボル・ポト時代 (1975-1979)<sup>2)</sup> にコンポン・トム州に居住していた1956年生まれの女性は、以下のような話を今でもなまなましく語ることができる<sup>3)</sup>。

住んでいた村にアープだと信じられている女性がいた。夜、青い光が見え、こちらが近づいて行くとその光は小さくなり、そのままその女性の家に入ってしまった。女性が病気で亡くなったとき、村人は、その女性が再びアープとなって現れないように、頭部を切り取り、女性の尻の穴をふさぐように置いた<sup>4)</sup>。

同様にボル・ポト時代の話として「隣の集落にアープ、トゥモップ<sup>5)</sup>がいた。自分の大便を食べるので、大便がその家の付近にみられないという。産婦の後産も好んで食べるので産婦は気を付けなければいけないと

2) ボル・ポト時代では、革命組織の名のもとに、旧社会の文化、価値観、社会制度、経済活動、学校教育、人間関係などが全て否定、破壊された。都市住民は地方に強制移住させられ、非現実的な農業を中心とした共産主義社会の建設が最優先された。約4年間に渡る同政権下での強制労働、飢餓、疾病のために多くの国民が命を落とした。都市住民が、1960年代、70年代に見た映画やテレビ番組の内容を、ボル・ポト政権側の人々に語った、語ることで死を免れたという話は、たとえば『消去』(リティ・パニユ、クリストフ・バタイユ著、2014)、『New Year Baby』(ソチアタ・ポウ監督、2007) や作家パル・ヴァンナリー・レアクによる発表「語ることで生き延びた:ものがたりの力」(混成アジア映画研究会主催シンポジウム、2018年3月23日開催)に見られる。

3) インフォーマントV.S氏(女性、1966年、プノンベン生まれ)が当時同居していた姉の話。2019年11月27日の筆者のインタビューによる。

4) 人の身体に宿っているアープの霊が外に出るときは、その人の肛門を通ると信じられている [ミアチ 1999: 114]。

5) アープと対をなす言葉で、男性妖術者を表す。本稿では取り上げない。

言われていた」<sup>6)</sup>というものもある。

いずれもポル・ポト時代、都市ではない地方の周縁部での話、今現在起こった話ではなく、また語り手自身の直接体験ではないという共通点はあるが、アープに関して一定の認識が広く共有されていることがわかる。

## 1-2 書き記された物語

アープに関する研究者の記述ではAng[1986]、ミアチ[1999]、アン[2007]が詳しい。Ang[1986:26]によると、アープは幽霊やお化けに分類されるものではない。アープとされる女性には2通りある。1つは母親からの継承によるもので、母親の死とともに自動的に引き継いだ女性、もう1つは、男性を惹きつけるための「スナエ」と呼ばれる呪術に長けている40歳前後の女性で、寡婦を含む既婚者である[Ang 1986:263-266]。また身体的な特徴として最初に挙げられるのが目である。「アープの目」という表現<sup>7)</sup>でカンボジア人に容易に理解されるように、大きく見開いた目を異常にぎよろつかせるとされる。あらゆる呪術や活動は多く夜に行われ、日中は普通の人間として生活している。夜になると、「アープの光」が青白い光を放ちながら低くゆっくり飛ぶ。近くで見ると頭部の下に内臓がぶら下がっているのがわかる。多くは炊事場近くの水はけの悪い、汚泥が溜まったところに食べ物を探しにくる。血や膿といったものも好む。あるいは雨の降った後、食べ物とするウシガエル<sup>8)</sup>、アマガエルなどを探しに出るといふ[Ang 1986:266-268]。

ミアチ[1999:110]では、アープとなった女性というのは、スナエの術を会得して使っているうちに、身体が呪術に侵され、アープの魂が体の中に入り込んだ状態にある、としている。そしてアープの魂に不愉快な思いをさせた人に腹痛、意識混濁、譫言などの症状が出る。夜にはアープの魂は体から抜け出し、蛍より大きな緑色の光を放ちながら浮遊し、血や死体、小さいウシガエルを探して食べる。特に出産したばかりの女性がいる家に後産を求めてやってくる。内臓が地面

まで垂れ下がり、上部に緑の光があるときは、それはアープなのである、という。

またアン[2007]では、風俗習慣が良く保存されているシエムリアップ州のアンコール地域で主に調査した通過儀礼に関する研究の中で、出産に関わる事柄として、以下のようにアープについて記述されている。

アープは人間とも言えるし悪霊とも言える。というのは、アープは村の普通の老女で、ほかの人より不潔でだらしないだけだが、夜になると身体から首と内臓だけが抜け出て、家の外で食べ物を探すこともあると信じられているからだ。考えるべき点は第1に老女であること、第2に酒を飲み、不潔でだらしないなどの理由により、人々から尊敬されない年寄りであるということである[アン 2007:63]。

「老女」というのは子どもができない年齢の女性である。よってアープになると新生児の象徴である血を舐める。「不潔」というのは、アープが好んで後産、排泄物などを食べると信じられていることからきているという[アン 2007:63]。またアープとなった女性自身には悪意はないのだが、その悪霊が身体の中において命ずるのだとされている。アープが産婦に危害を加えないように、排泄物、汚物で汚れる場所に棘のある木や枝を置くのは、アープは頭部の下にぶら下がっている自身の内臓物がそこに引っかかるのを恐れて近づかないからだという[アン 2007:63]。

Ang[1986]によれば、ルクレール<sup>9)</sup>が17世紀にアープが出現したことを記録しているという。またフランス保護国時代の1938年にグイ・ボレ、エヴリーヌ・マスベロが発表した著書では、アープは「妖術者」として次のように説明されている。

アプ<sup>10)</sup>という妖術者は、生まれながらの女の妖術者、または男に恋情を催させる方法を研究した挙句になるものが多い。彼女は相手を呪い殺す恐る

6) インフォーマントU.M氏(男性、1963年、プノンペン生まれ)の発言。彼はポル・ポト時代にはタケオ州に強制移住させられた。2019年11月21日の筆者のインタビューによる。

7) 日本語の「ぎよろ目」に相当する。

8) 動きが緩慢、かつ外見が醜悪な生き物で、人から忌み嫌われるものの象徴とされている。

9) Adhémar Leclère(1853-1917)。カンボジアで弁務官を歴任、カンボジア研究者としても数多くの著作を残している(<[https://data.bnf.fr/fr/12515791/adhemard\\_leclere/](https://data.bnf.fr/fr/12515791/adhemard_leclere/)(最終閲覧日2020年1月9日))。

10) 訳書の表記のまま。

しい力を持っている。また一種独特の眼つきをし、血走っていることが多い。話によれば、夜中に彼女は皮膚から抜け出し、頭と腸だけで飛んで廻り、その跡には青味がかかった跡が残るといふ。彼女はそこに止まるとは、がつがつと大便を漁り、しまいには寝ているものの尻にまで吸いつく。以前にはこの妖術者は沢山いたが、今では殆ど姿を消した [Ang 1986: 270]。

初期の民族主義者によって創刊されたカンボジア語紙『ナガラワッタ』には、「アープ」という言葉は見られないが、第72号、1938年6月4日付の同紙には、呪術を禁止する法律が施行された記事が掲載されている。それによれば、1934年7月27日の国王布告で、クメール刑法第298条として「『自己が強力な超能力を持つ』と人々に信じさせ、人々に騒ぎと混乱と不安を起こさせた者は、第1級中級罰に処する。この規定は、妖術、スナエ、その他の呪術を使用する者全てにも適用される」という項目が追加されたという。前述のAng [1986] やミアチ [1999] にも記述されているように、アープとされる女性が使うという呪術「スナエ」にも言及されている。当時、アープによるものを含むさまざまな呪術が行われ、社会に影響を与えていたことを政府も認識していたことが窺える。

一方、1938年に編纂されたカンボジア初の国語辞典の「アープ」の項には「女性が使う悪い呪術の名前のひとつ。悪霊を捕らえて他人に腹痛など肉体的な痛みを与える儀式などがある」と説明されている。小見出しには「アープをとらえる呪文」、「憑いていた人から追い出された悪霊」、「アープの家系」が挙げられている。また坂本恭章著『カンボジア語辞典』(2001) では、「アープ」は「悪霊を人にとりつかせて害を加える術」とし、小見出しとして上記の国語辞典の記述に加えて、「悪霊」、「アープをかける」、「鬼火、きつね火」「アープを行う呪術師(女)」、「①アープの術を使う女、②悪女」を例示している。

辞書の定義からは、「アープ」という語彙自体には、アープになった女性、その女性が使う呪術、その女性の身体に宿っている霊を指す場合があることがわかる。

## 2 「アープ」映画の始まり

### 2-1 ふたつの『我が子よ、母はアープ』

カンボジア映画史上初めてアープを題材とした作品は『我が子よ、母はアープ』で、同名の異なる作品が2本ある<sup>11)</sup>。

ひとつは、すでに内戦が激化していた1974年にスン・ブンリー監督によって制作されたもので、当時のトップスターのチア・ユットトーンとプオン・パヴィーが主演している [Huy 2020: 99]。しかし社会情勢の悪化から同作品は公開されておらず [Huy 2020: 99]、またフィルムの所在も不明である<sup>12)</sup>。

1960年代からボル・ポト時代となる1975年までの期間は、カンボジアにおける映画産業の黄金時代であったとされ、500本を上回る作品が作られた [Huy 2020: 7]。それにもかかわらずアープを題材とした作品はこの作品以外作られなかった<sup>13)</sup>。当時、ローテクではあるが、『天女伝説プー・チュク・ソー』(ティア・リムクン、1967) や『12人姉妹』(リー・ブンジム、1968) のように、特撮によるシーンを含む作品もすでに多数あり<sup>14)</sup>、「内臓物をぶら下げて浮遊する女性の頭部」を撮影する技術が不足していたとは考えにくい。アープは一般的に幽霊やお化けとして捉えられていないので<sup>15)</sup>、作品にしてもホラー映画と判断されない、また排泄物や動物の死体を好んで食べるような不潔な存在、人々から忌み嫌われ、退治される対象であるアープを題材とした映画は興行収入が期待できないと考えられた可能性もある。

一方、名実ともにカンボジア映画史上最初のアープ映画となったのが、ヌット・サロン監督『我が子よ、母はアープ』である<sup>16)</sup>。この作品の制作年は明らかでは

11) 女妖術者としての「アープ」が端役として登場する作品はある。たとえば『ケンコン蛇2』(1973) [Huy 2020: 134]

12) プノンベン市のボバナ視聴覚資料センターでは、2019年11月25日現在、同作品の所在について把握していない。なおインターネット上では同作品のものと思われるポスターが確認できる。

13) フィ・ワタナ氏の2019年11月19日の私信による。

14) スン・ブンリー監督はカンボジア映画史上初めて特撮技術を使用した監督でもある [Huy 2020: 96]。

15) カンボジアの典型的なお化け、精霊、幽霊のエピソードから構成される小説『怪談 ខ្មែរ ព្រលឹងអ្នករស់』(チュット・カイ、1973) は、現在でも国内外の多くのカンボジア人から支持を得ており、時代を経て何度も復刻されている本だが、この中にもアープに関する物語はない。

16) フィ・ワタナ氏の2019年11月24日の私信によれば、同作品は1974年の作品のリメイクの可能性も否定できないという。

ないが、1990年代に制作されたと考えられる<sup>17)</sup>。それは映画制作会社、また出演者からある程度推測することができる。

同作品を制作したのはアンコール・ワット映画社である<sup>18)</sup>。1980年代、90年代のビデオドラマ映像作品群に挿入されているオープニングロゴを分析した研究結果では、アンコール・ワット映画社の設立は1992年とされている<sup>19)</sup>。1990年にプノンペンで開かれた第1回ビデオ・映画祭の際に、同委員会から発行された冊子『1990年 ビデオ・映画祭』には、全157社の映画制作会社一覧が掲載されているが、アンコール・ワット映画社の名前は見られない。このことからおそらく同映画社が設立されたのは1992年であるという情報は正しいと言えよう。

主演俳優の一人、アープ役のピセット・ピリカ(1968-1999)<sup>20)</sup>が映画俳優としてデビューしたのは、ポル・ポト政権下の人民の苦しみと抵抗を冒険活劇風に描いた『闇の影』(イーヴォン・ハエム、1987)である。その後、「涙の女王」として人気が高まり、1995年までに30以上の作品に出演している[プロチアプライ1995]。その人気を反映して、1994年に創刊され当時最も多い購読者数を誇っていた総合雑誌『プロチアプライ』の表紙をピリカは何度も飾り、また亡くなった1999年7月の翌月には特集号が組まれた。一方、息子ハンサを演じたカイ・ブラシット<sup>21)</sup>は実生活ではピリカの夫で、二人は『闇の影』で初共演してからというもの、ゴールデンコンビとして次々と映像作品に出演した[ピセット・ピリカ4-5]。1995年頃からはピリカはアメリカなど海外での芸能活動に忙しくなったという[ピセット・ピリカ5-7]。

17) インターネット上で散見される情報では、制作は1980年あるいは1984年とされ、ポル・ポト政権崩壊後、最初に制作、公開された映画作品であるとされている。

18) アンコール・ワット映画社という名の映画制作会社は、1960年代および1970年代前半にも存在したが、社長は当時のトップスターであったコン・ソムウアンであり[Huy 2020: 159]、同氏はポル・ポト時代に亡くなっているため、同名の別会社と考えられる。

19) カンボジアの映画についてまとめた動画リスト「CAMBODIA NOSTALGIA “Khmer 1980s and 90s”」による(<https://www.youtube.com/playlist?list=PL956960962D930088>(最終閲覧日2020年1月9日))。

20) 1999年7月6日の白昼、プノンペン中心部で何者かに銃で撃たれ、亡くなった。

21) 『1990年 ビデオ・映画祭』に掲載されているインタビューでは、年齢は30歳、すでに34作品に出演したと語っている[バエン他1990: 46]。

これらのことを併せて考えると、『我が子よ、母はアープ』は1992年から1990年代半ばの間に制作されたと考えられる。

## 2-2 『我が子よ、母はアープ』のあらすじ

前近代。貧しくも美しい村娘オーイは祖母と二人で暮らしていた。豪族コムハエンが村を視察に来た折に、オーイに水を飲ませてもらったことから、二人は相思相愛の仲になる。オーイの祖母は、当初は二人の関係については反対するが、コムハエンとは前世からの縁なのだろうから、別れることはできず、身分違いで苦しい恋愛になっても慕っていくのがオーイの運命である、とオーイを見守る。オーイは未婚のまま妊娠する。だがコムハエンは「オーイと祖母を引き取る」という約束を破って裕福な娘ケマーと結婚する。それを知ったオーイはコムハエンの屋敷を訪ねる決意をする。祖母は「何も食べなくても死なない」、「自分の命と子どもの命を守るときにアープになれる」という2種類の呪術を伝授する。

コムハエンに会ったオーイはケマーによって地下牢に閉じ込められ、拷問される。さらにケマーは無関係な男を金で雇い、オーイの愛人であるとコムハエンに信じ込ませる。ある晩、雷の轟く中、オーイは男の子を産み落とす。コムハエンとケマーは親子とも殺すよう看守たちに命じるが、看守たちは赤ん坊を森に棄て、オーイはアープとなって赤ん坊を探す。赤ん坊は義賊のグループに連れ去られる。

ハンサと名付けられた赤ん坊は山奥で育てられ、武術に長けた筋骨たくましい青年に成長する。オーイはハンサの育った土地の鎮守から子どもが生きていることを知らされ、ハンサの夢の中でこれまでのいきさつを語る。ハンサは幼馴染のニモルを妻とし、オーイのいる地下牢にたどり着き、ニモルとともにコムハエンたちと闘う。そこにかつてケマーに雇われた男がやってきて真実を告白し、コムハエンはハンサが実の息子であることを知る。ケマーは自らの悪事が暴露され自殺する。ニモルはオーイに帰郷を促すが、オーイは「アープとなった姿を人に見せてはいけない、自分の子どもの汚物を食べてはいけない、という掟を破ってしまったため、もう普通の人間には戻れない」と言って自ら火の中に身を投げる。

### 3 新時代への転換

#### 3-1 内戦終結の兆し

『我が子よ、母はアープ』が制作された時期は、カンボジアの政治体制が大きく転換する過渡期にあった。

前述の通り、ポル・ポト時代以前は、カンボジア映画産業は黄金時代を迎えていたが、続くポル・ポト時代では、旧社会の在り方を否定し、極端な共産主義が急速に推し進められ、その結果、文化芸術に携わる人々が多く命を落とした<sup>22)</sup>。ポル・ポト政権崩壊後の1979年1月以降、カンボジアは、ベトナム指導型の社会主義体制となり、すべての芸術文学活動は党中央と社会主義のイデオロギーに奉仕するものでなければならなくなった [Khing 1999: 32]。この新しく発足した社会主義政権に反対する3派勢力<sup>23)</sup>がタイ・カンボジア国境を拠点として活動し、日本を含む西側諸国はこの3派連合をカンボジア政府として承認していた。こうしてカンボジアは再び内戦の地となった。

だが東西冷戦の収束とともにカンボジアにも変化が訪れる。カンボジアに駐留していた20万人ものベトナム軍は1989年9月までに完全撤退した。同時にカンボジアは国名を「カンボジア国」に変更し、赤と黄の二色だった国旗に青色を加え、社会主義色を抑えた。カンボジア各派による話し合いが外国の支援のもとに行われ、和平への兆しが見えるようになってきた。1991年10月、パリでカンボジア和平協定が調印され、同年11月、かつて「パパ王様」として人々に親しまれてきたシハヌークがカンボジアに帰国、熱狂的に迎えられた。1992年2月、武装解除、総選挙の実施などを任務とする国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)が発足した。1993年5月に総選挙が行われ、同年9月新憲法が公布、シハヌークが再び正式に国王となり、カンボジアは再びカンボジア王国となった。

#### 3-2 映画産業の再興

このような政治的状況の変化は映画業界にも大きな影響を与えた。ポル・ポト政権崩壊後、カンボジアで上映されていた映画は主に、ベトナムをはじめと

して、ソ連、東ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ブルガリア、キューバなど東側ブロックからの作品であった<sup>24)</sup>。1980年代初頭にはプノンベンを中心部にあるモスクワ座<sup>25)</sup>で、『3+4:カンボジアの300万人の死者と400万人の生存者』が商業映画として上映された [Kubeš 1982: 172]<sup>26)</sup>。だが次第に国内での映画制作活動も動き始める。1960年代に数々のヒット作を生み出したイーヴォン・ハエムは、既述の『闇の影』(1987)を制作した。これは、ポル・ポト政権崩壊後、同氏の初めての作品となった [Ly and Muan 2001: 175]。また1989年1月7日のカンボジア人民共和国建国10周年記念に合わせて、情報文化省から発行された写真集『最近のカンボジア』(1988)では、文化芸術を紹介する頁に、現代風の服装の男女3名の俳優が撮影に臨んでいる写真が掲載され、キャプションには「長編映画を撮影」とある。

既述の1990年に開催された第1回ビデオ・映画祭の冊子『1990年 ビデオ・映画祭』からも映画産業再興への意気込みが感じられる。以下は、同冊子の冒頭に掲げられている映画祭実行委員会委員長の開会スピーチからの抜粋である。

そもそもビデオ映画分野は、1979年から1984年までは外国のものだけでしたし、数も多くありませんでした。ところが1984年から1989年までの間に、非常に多くのビデオ作品が入ってきました。このビデオの影響は国中に広まっていて、国内の演劇やその他、さまざまな芸術を押し潰し、我が国の

24) U.M氏に対する2019年11月21日の筆者のインタビューによる。同氏はポル・ポト政権崩壊直後の1979年末に、強制移住先のタケオ州からプノンベンに戻っている。当時の外国映画については、カンボジア語への吹替えや字幕はなかった。1980年代は、ベトナム、ソ連、またその他東側ブロックに所属する国々の映画作品が上映される映画祭が毎年、それぞれの国ごとに開催されていたという。また、ポル・ポト政権崩壊後は強制移住先のコンボン・トム州に留まっていたV.S氏によると、駐留するベトナム軍主催による野外映画上映会が頻繁にあったという。1982年には、『母』(マクシム・ゴーリキー原作、フセボロド・ブドフキン監督、1926年、ソ連)や、ディエンビエンフーの戦いに関するベトナムのドキュメンタリー映画を鑑賞したという。

25) ポル・ポト時代前、また1993年以降は、ヴィミアン・トゥップ座と呼ばれていた。現在は改装されてベーカーリーとなっている。

26) この作品は1979年のライプチヒの国際ドキュメンタリー・アニメーション映画祭(DOK Leipzig)で受賞している [Kubeš 1982: 172]。

22) 鈴木 [2018: 73-74] も指摘しているように、1960年代、70年代前半の映画作品が失われた原因はさまざまであり、ポル・ポト時代だけにその理由を求めるのは不合理である。

23) ポル・ポト派、シハヌーク派、また1970-1975年の親米政権時代の流れをくむロン・ノル派の3派。

芸術は消滅の危機にあります。

外国のビデオを我が国に紹介することは、我が党、我が国の開放政策に沿ったものです。と同時に我が国の青年男女、人民は、外国ビデオが大量に国内に流入するのを抑止し、自分たちのビデオ作品を創造したいという強い希望を持つようになったのです。

同冊子には映画・ビデオに関する法律も掲載されている。「ビデオ・映画の統制と検閲に関して」、「ビデオ・映画の内容、映像、商業活動における統制と検閲実施に関する指導」、「ビデオ・映画の商業活動、輸出入に対する課税およびビデオ・映画制作の営業許可の施行の告知」、「ビデオ・映画の輸出入と配給に関する商業活動方針施行の告知」が、1989年6月から1990年1月までの間に次々と出されており、カンボジア国となってから、政府主導で短期間のうちに国内の映画産業を活性化させようとしたことがわかる。

その他、同冊子には、既述したように映画制作会社一覧、映画およびビデオ作品のポスター写真13点、スチール写真25点、作品名133タイトルが掲載されている。これらを見る限り、現代を舞台にした若い男女の恋愛、家族の物語がテーマになっており、古典文学などを題材にしたものやホラーといったジャンルの作品は見受けられない。

## 4 彩られる物語

1980年代、1990年代の映像作品200点を集めた動画サイト「CAMBODIA NOSTALGIA “Khmer 1980s and 90s”」によると、ほぼすべての作品が現代を舞台にした若者の恋愛と家族の物語をテーマとしている。そのような傾向の中で、前近代を舞台とした『我が子よ、母はアープ』はかなり特殊な作品だったと言えよう。

### 4-1 伝承されてきたアープの表象

『我が子よ、母はアープ』は、初めてアープの物語に触れる観客にもわかりやすい描写がされている。登場人物すべてがアープについて知っているわけではない、という設定になっているのである。町にあるコムハエンの屋敷の若い門番や看守たちは「頭部がなくて胴体だけがある、あれは何というのですか」、「胴

体がなくて首だけのお化けが追いかけてくる」と言う。一方、オーイの出身村では、年配女性が「このところ、夜な夜な子どもを探す声が聞こえる。お化けかアープではないだろうか」と言う。これらのセリフは、内戦やボル・ポト時代といった20年近い社会的混乱の時代を経てアープという伝承が途切れかかっていることを含意しているかのようである。

それに応えるかのように、オーイが初めてアープになる兆候が見られるときには、舌なめずりをする、目をぎよろつかせる、という顔の表情がアープで映し出され、地下牢の蝙蝠の死骸を貪り食う様子が映し出される。また頭部に垂れ下がった内臓物がつながったまま、その中心あたりに緑色の光を点灯させて浮遊する。これまでカンボジアの人々によって語り継がれてきたアープ像とそれにまつわるエピソードが、この作品によって可視化されたのである。

### 4-2 伝承されてきたアープの物語との相違点

一方で『我が子よ、母はアープ』では、これまで語り継がれてきたアープの物語とは異なる点が4点挙げられる。

#### 4-2-1 アープ自身の出産

最大の相違点はアープ自身が出産する、という点である。伝承されてきたアープの物語では、アープとなる女性は後継者となる娘や孫娘がいることもあるので、出産経験がある場合もある。しかし、子どものできない年齢の女性がアープとなると言われてきた[アン63]のとは異なり、オーイは出産前後に初めてアープになる、という設定である。

#### 4-2-2 アープとなった理由

オーイがアープとなった理由は、祖母からの強制的な継承<sup>27)</sup>でも、男を魅了するための呪術スナエの濫用からくるものでもない。また、何も食べなくても死なない、という術をアープになる術と同時に与えられているため、夜、胴体から頭部が抜けて外を浮遊するのも、他人の後産、排泄物や汚物を探して食べるためではない。あくまでも連れ去られた自分の子どもを探そうと、地下牢から抜け出すためである。

27) 祖母がどのような経緯でアープとなる術をオーイに伝授したのかは、物語では明らかにされない。祖母は、村で夜、子どもを探す声がする、アープかもしれないという噂を聞いて怯えて隠れる場面があることから、おそらく祖母自身は呪術を行ったり、アープになったりすることはできない設定だと考えられる。

### 4-2-3 アープの掟

「アープとなった姿を人に見せてはいけない、自分の子どもの汚物を食べてはいけない、それを破れば普通の人間には戻れない」という掟は、通常のアープの伝承には語られてこなかったものである。他者の行動で違反してしまうもの、自己の行動で違反してしまうものの二つから成っている。前者の掟は、四六時中看守がついている監獄の中で守ることは不可能なことであろう。またもう一方の、自分の子どもの汚物を食べない、というのは、人間と動物を隔てる点でもある。しかしオーイは、子どもを救うためにアープになったものの、アープになったために自分が出産したばかりの子どもを覆っている汚物を食べたい、という自己矛盾と葛藤が生まれてしまう。それは子どもを抱くオーイの表情に如実に表れる。オーイが地下牢に閉じ込められる前から転がっていた髑髏の目が緑色に光ることで、アープとしての欲望が勝ったことが示される。こうして二つの側面からオーイは普通の人間であり続けることをやめざるを得なくなる。

### 4-2-4 アープの自死

語り継がれてきたアープは、村人に退治されるか、寿命が過ぎて死ぬ[ミアチ 1999: 112]。オーイは、アープになったばかりの頃は子どもが殺されたと誤解していたために、コムハエンの妻ケマーへの復讐、殺害を当事者たちの前で声高に宣言する。しかし立派に成長した息子に会い、真実を知らせた後は、コムハエンに対して実の息子の存在を知って欲しいだけで恨んではない、と言い、復讐することを自ら放棄する。そしてカンボジア版ラーマヤナ『リアムケー』<sup>28)</sup>の女性主人公セダー<sup>29)</sup>が火に飛び込んで自らの貞潔を証明したように、オーイは自ら火の中に飛び込む。それによって、夫への貞潔、自らの行為の正しさ、そして普通の人間の姿で生きられない母を持つという辱めを息子とその妻に受けさせないという、子どもに対する愛情を示す。人間として尊厳をもって生きられず、共同体からも受け入れられないであろうオーイは、人間としての生を自ら閉じるための行為を選ぶ。オーイに宿っていたアープは誰にも継承されることなく消滅する。

28) 森で育てられた息子と父親が再会する、という点も『リアムケー』と類似している。

29) ラーマヤナではシーター。

## 5 受け継がれる物語

### 5-1 古典への回帰と黄金時代の映画の再生

『我が子よ、母はアープ』はアープという物語自体だけではなく、古典物語の構成も受け継いでいる。

まず内容の構成であるが、『我が子よ、母はアープ』の村娘と高位の男性の恋愛、村娘の妊娠、後妻による拷問と幽閉、息子の誕生、成長した息子と母の再会、父による息子の承認というプロットは、たとえば仏教説話であるジャータカの一つである『12人姉妹』と類似している<sup>30)</sup>。またストーリーも前半が「母の物語」、後半が「息子の物語」で成り立っている点も『12人姉妹』に共通している。

楽曲の使い方は、1960年代、1970年代前半の映画作品では、明るいシーンでは西洋音楽を使用し、哀しいシーンでは伝統楽器のソロ演奏曲が使用されるのが一般的であった[Ly and Muan 2001: 183]。『我が子よ、母はアープ』でもその手法が踏襲されている。オープニングの制作スタッフ、出演者のクレジットは、豪族コムハエンが輿に乗って屋敷から出かけていくシーンに重ねられているが、その際のBGMは『スターウォーズ エピソード4／新たなる希望』(1977)のエンディング曲「王座の間」の一部が使用されている。またオーイとコムハエンの仲睦まじいシーンでは「アメイジング・グレイス」が流れる。オーイが苦悩するシーンでは笛クロイ、弦楽器サーディアウとトローそれぞれによるカンボジアの伝統的な楽曲のソロ演奏が挿入されている。

配役についても1960年代、1970年代前半に悪役として名を馳せてきたホイ・サンが豪族コムハエンを演じ、老女役として名脇役を務めてきたマエ・ムーン<sup>31)</sup>がオーイの祖母役で登場する。当時、ゴールデンカップルが次々と誕生し銀幕を賑わせたのと同様[Huy 2020]、新世代のゴールデンカップルであるピセット・ピリカとカイ・プラシットが主演を務めている。

つまり『我が子よ、母はアープ』は、かつて人気のあった古典物語になぞらえた作品だといえる。これまで語り継がれてきたアープの物語との相違点を持つ

30) 『12人姉妹』については拙稿[2018]を参照

31) [1990年ビデオ・映画祭]に掲載されているインタビューで、75歳で現役であること、1979年以降からインタビュー時までには12本の作品に出演している、と語っている[パエン他 1990: 32]。

のは、まさにこの理由による。同作品が制作された時期は、長らく王族の存在や神々や仙人といった描写を認めてこなかった、あるいは評価することが政治的に困難だった社会からの過渡期にあった。従って古典物語を題材にした映画作品の評価も定まっていなかったのである<sup>32)</sup>。かつては、古典物語を題材にした映画は、王や姫、大臣などが過ごす宮廷と、危機に瀕した主人公を助ける仙人が隠遁している森、あるいは神々が住む天上などの場面对比されながら物語が展開していた。『我が子よ、母はアープ』では、時代を前近代にすることで、現代ではなく、より古典物語の時代設定に近づけ、王は豪族、仙人は鎮守や義賊に置き換えられている。そして仙人や神々による超自然的な助けがない代わりに、オーイはアープという付与された呪術で自ら危険に立ち向かう。

## 5-2 戦後社会の投影

一方で『我が子よ、母はアープ』には、制作当時の混沌とした1990年初頭の戦後社会をも見ることができる。老若男女の人口比は不均衡になっている。オーイの暮らす質素な村では女性と老人だけで、壮年男性や子どもは見られない。またコムハエンのいる町や屋敷では妻のソカー以外はほとんど男性ばかりで、物質的には豊かではあるが、暴力、欲望、嫉妬、不実が渦巻いている。地方に住む、若く美しく貧しい女性は生きるためにすべてを捨てて町に行く。町には知り合いもおらず、誰からも歓迎されない。家族のために大きな犠牲を払い、人から忌み嫌われる存在になる。これは1990年初頭の内戦終結後の混乱期を描いた『戦争のあとの美しい夕べ』(リティ・パン、1998)の女性主人公スレイパウの物語と重なる。

社会主義は消滅し、カオスにも似た自由主義となった。市場経済の導入で人々は拝金主義へと走り、米は底をついて「たんぼの民」は都市へ向かった。富める者はいよいよ富み、貧しき者はさらに貧しく

32) 1987年に発表されたカンボジアの現代文学についての論考[パウ 1987]では、ボル・ポト時代より前の時代で国民文学とされてきた主要な作品は取り上げられず、「マルクス・レーニン文学理論に従って分析する」ための作品が取り上げられている。たとえば、カンボジア版「ロミオとジュリエット」とも言われる、『トムとティアウ』は、史実に基づく物語として王が登場する韻文形式の悲恋物語であるが、封建制度による圧制、独裁的な統治、そして、人民の抵抗、反動からの自己解放を描写している点を強調し、高く評価している。

なった。家族の絆は切れ、人との信頼関係は崩れ、抛り所を失い、ひとりひとりが孤独になった。一握りのニューリッチたち、土地を持たない農民、復員兵士、地雷の被害者、ストリート・チルドレン、売春婦……。戦争が終わった今、身体的な暴力は、自由という名の暴力にとって代わった[岡田 2000: 39]。

1990年初頭、政治的には滞りなく安定に向かっていくように見えていたが、人々の実際の生活は混乱を極めていた。1992年からの1年間で37万人がタイ国境の難民キャンプから帰還した[上田 2012: 253]。また1980年代末からの市場経済、対外開放とともに性産業が盛んになった。UNTAC駐留時代には性産業従事者は2万人、1990年代半ばには性産業従事者の3割が18歳未満、さらに1998年には性産業従事者の約6割がHIV感染者だったという[天川 2006: 231-232]。

しかし、スレイパウが恋人の死後、生まれた子どもを希望として生きていこうとしたように、アープとってしまったオーイにとって、息子ハンサは希望であった。男の子はアープを継承できない。そして幼馴染の健康的な女性ニモルを妻としている。自らの死後、若い二人は新しい家庭を築き、次の世代を担っていくことがオーイの願望であったはずである。

## 6 変容していく物語

内戦終結後の1993年、新生カンボジア王国は複数政党制、市場開放政策を導入した。文化的にも共通点が多いタイからの映像コンテンツが大量に輸入され、復興しかけた国内の映像産業は急速に後退した。ピセツ・ピリカをはじめとして著名な俳優たちは、文化芸術省の無策により、タイからのテレビドラマなどの映像コンテンツが大量に国内に流入しており、芸術活動が立ち行かなくなっている、と訴えた[プロチアプライ 1998]。『プロチアプライ』に掲載される芸能情報は、タイ人俳優に関するものが次第に増えていった。特にテレビドラマ『平安の星』<sup>33)</sup>で主演していたタイ人女優スワン・コンギンは、カンボジアでは本

33) タイ語タイトルは『Dao Pra Sook』(1994)。

名ではなく「暁の星」というドラマ内の配役名で呼ばれ、国民的人気を得ていた。

2003年、その「暁の星」が「アンコール・ワットはタイのものだった」という発言をした、という噂がメディアを通して広がった結果、プノンベンタイ大使館やタイ資本企業などがカンボジア人群众によって襲撃され、政治問題にまで発展した<sup>34)</sup>。これはタイのテレビドラマがどれほどカンボジア国内に浸透していたかがわかる事件でもあったと言える。事件後すぐに、タイの映像コンテンツは使用禁止となったため<sup>35)</sup>、図らずも国内映画産業振興のきっかけとなった。文化省に登録された映画制作会社は2005年には55社となった〔岡田 2012: 324〕。

そのような状況の中で、『我が子よ、母はアープ』以降、初めてアープを題材とした作品が登場した。それは『アープを焼き尽くす炎』(2004)、『アープ』(2004)、『逆立ち髪のソンポン』(制作年不明<sup>36)</sup>)の3作品である。これらの作品に共通しているのは、女性がアープになる際に横たわり、身体的な苦痛が伴う、頭部が内臓を伴って胴体から抜ける場面を入念に描写する、アープになる女性は性暴力の被害者自身かその祖母、母であり、復讐を決意している、呪術師がアープの攻撃に対抗できる呪文や護符を与える、僧侶がアープになる女性に対して、アープとなったのは業によるもの、善行や瞑想を行なうように諫める、などの点である<sup>37)</sup>。これらの点は『我が子よ、母はアープ』では見られなかった点である。この時期に制作された作品に登場するアープ像が、アープの標準的な表象となっていく。

ここ最近の10年間では、従来とは異なったアープも描かれるようになった。『ヘルメットをかぶったアープ』(2012)では、アープになる女性は、地方に住み夫もいるが、若くて美しく健康的で、若い独身男性たちから好意を寄せられる人物として魅力的に描かれている。アープになる際も身体的な苦痛はなく、ま

た周辺の登場人物もアープである女性を受け入れる。僧侶の姿はもはや見られない、あるいは存在しても影響力を持たない。このようなアープ像は人々から支持され、これまでにない興行収入を記録した<sup>38)</sup>。おそらくこの人気を受けて、『ヘルメットをかぶったアープ2』(2013)、『ハイソなアープ、009』(2013)、『キュートなアープちゃん』(制作年不明<sup>39)</sup>)、『恋人はアープ』(2012)など、人々から愛されるアープが主人公となる作品が同時期に作られた。これまで受け継がれてきたアープ映画は、どちらかという陰鬱で悲哀を帯びたものだったのが、新たにコメディというジャンルに進出したのである。

## おわりに

『我が子よ、母はアープ』は、社会主義体制から複数政党制に基づく民主主義と王制の復活、そして市場開放という過渡期にあって、これまで受け継がれてきたアープの物語を初めて視覚化した。同時に、アープの物語に新たな彩りを加えて、古典物語の形式と黄金時代の映画の物語をも受け継いだ。

現在もアープはカンボジアの人々の日常に存在している。「4、5年前までは、住んでいる村でアープがよく出現する、という噂があったが、最近では聞かなくなった」などと、若い世代から、アープに関する言説を聞くことができる<sup>40)</sup>。またマスメディアでもアープに関係する事件が報道されている。2019年にカンボジアの東部、モンドルキリ州<sup>41)</sup>で起こった殺人事件では、容疑者である少数民族プノンの男が男性被害者からアープ、トゥモップの呪術を行う者であると非難されたという理由から犯行に及んだという<sup>42)</sup>。当事

38) Webサイト記事「リアク・リダLDプロダクション社長、『ヘルメットをかぶったアープ』以降、映画産業界で成功」による (<http://news.sabay.com.kh/article/1098227>(最終閲覧日2019年11月28日))。

39) 出演者や服装、画質から、最近制作されたと考えられる。

40) インフォーマントT.S氏(女性、2000年生まれ、タケオ州出身)に対する、2019年11月1日の筆者のインタビューによる。

41) 首都プノンベンから約520キロ離れている。2010年の世界銀行の統計によれば、モンドルキリ州全体に対する少数民族の割合は約70%、またプノンのみでは約60%である (<http://documents.worldbank.org/curated/en/760731511363158708/pdf/SFG3807-IPP-KHMER-P162971-Box405311B-PUBLIC-Discovered-11-22-2017.pdf>(最終閲覧日2020年1月9日))。

42) カンボジア国家警察公式ページ「刑事警察、殺人事件に関与した男の身柄を拘束」2019年5月12日投稿による (<http://camboadiapolic.com/policekh/161844>(最終閲覧日2020年1月9日))。

34) カンボジア政府が速やかにタイに謝罪、被害金額を支払ったことから、3か月後には両国関係は正常化した〔初鹿野 2012: 219-220〕。

35) タイのコンテンツが使用不可であった期間については、今後の調査が必要である。

36) 出演者や画質、音声などから2000年代半ばあたりに制作されたと考えられる。

37) 津村〔2015: 51〕では、タイの女性幽霊の物語のひとつであるナン・ナーク物語と仏教の関係について述べている。

者は男性であり、「アープ、トゥモップ」が1語で「呪術」の代名詞として使われている<sup>43)</sup>。アープは比喩表現として使われることもある。カンボジアの最大野党の元リーダーであるサム・レンシーは、選挙にあわせて創設されて与党におもねる政党のことを「頭部はなく、抜け殻の胴体だけ」、「ちらちらと蛍のように輝く<sup>44)</sup>アープのようだ」と批判している<sup>45)</sup>。

またアープを題材とした作品としては、長編映画のみならず、短編アニメ<sup>46)</sup>、テレビのバラエティ番組<sup>47)</sup>、小説<sup>48)</sup>、絵本<sup>49)</sup>、など、さまざまな場面で取り扱われている。

43)「高齢の農民がアープ、トゥモップの呪術に関連して殺される ភស្តុតាងយំចំណាស់ស្តាប់ត្រូវ គេសម្លាប់ពាក់ទិននឹងអំពើអាបធូប」2016年5月6日付 *The Cambodia Daily* (最終閲覧日2020年1月10日)の記事によると、カンボジアの南部に位置するコンボン・スプ州で起きた2016年の事件では、農業を営む79歳の男性が、アープ、トゥモップの呪術を使って近隣の村の人々の命を次々と奪ったとして、村の男性に刺殺された。村人たちは以前から警察に被害者男性が呪術を使用していることを訴え出ており、それに対して警察は被害者男性の家屋などを調査して、アープ、トゥモップではないことを村の集会などで説明してきたという。また、北部ストゥン・スラエン州で起きた2017年の事件では、少数民族クオイの夫婦が、アープ、トゥモップといった呪術を使う者として村人から疑いをかけられた上に虐げられ、これ以上恥をしのんで生きていけないと無理心中を図ったとされる(「アープ、トゥモップの術を使う者であるからと村人に批判され、生きていたくないと妻を刺殺、自らは死ねず」(<https://kohsante.pheapdaily.com.kh/article/161496.html> (最終閲覧日2020年1月9日)))。

44) 日本語の「玉虫色」と同義。

45) Radio Free Asia 2018年7月8日放送「サム・レンシー氏、批判する：与党は国賊党、残りの弱小19政党は力を持つアープ政党」(<https://www.rfa.org/khmer/news/politics/rainsy-criticize-cpp-and-11parties-07082018112115.html> (最終閲覧日2020年1月10日))。その他、タイとカンボジアが国境付近に位置するプレア・ヴィヒア遺跡の所有を巡って争っていた頃にカンボジア人個人のウェブサイト「謹賀新年」に投稿された2010年8月2日の記事では、タイの政治家たちを批判するのに「タイのアープたち」という表現を使用している(<https://sopheap.wordpress.com/2010/08/02/ap-thai/> (最終閲覧日2020年1月9日))。

46) Bro Cartoon KH制作『アープ (នាងអាប)』(2019)、Runara制作『二匹のアープ乙女 (អាបក្រមុំពីរក្បាល)』(2019)などがある。

47) 「アープ007 អាបកាលីប័007」はCTNテレビのバラエティ番組の中の人気コメディアンたちによる10分ほどのコントで、偽物のアープで村人や新聞記者たちから金を騙し取ろうとする3人の男たちの話である。物語ではアープは男だが、村人や新聞記者たちは違和感を見せない。

48) Sabayの小説サイトに『聡明なアープ、利口な村人と対決 អាបកំពូលឆ្លាតវៃ៖អ្នក ភូមិកំពូលល្អិត』(リム・サンテピアップ、2015)がある(<https://enovel.sabay.com/book/263/detail> (最終閲覧日2020年1月9日))。

49) 子ども向け書籍専門出版社Reading Booksが出版している「物語世界シリーズ」第112巻に『アープばあさん (យាយអាប)』(2012年)がある。

現在では一般的になったアープの表象は、タイの映像コンテンツが圧倒的な支持を得ていた1990年代に、タイのピー・クラスー<sup>50)</sup>の表象から影響を受けた可能性もある<sup>51)</sup>。ピー・クラスーは次に紹介するように、アープの描写と酷似している。クラスーはピー(精霊)に分類され[津村 2015:63]、また他の女性に憑りつかれた女性で、内臓を下げた頭部だけで浮遊し、「汚い」あるいは「不潔」なものを好んで食べ、夜に食べ物を探すときに緑の光をびかびかと放つ。そして出産したばかりの産婦がいる家に行き、血を舐める。また若い女性より年配の女性が多く、生のもはや臭い食べ物はもとより、人間の糞も好むため、公衆便所の近くで遭遇することもあるという[Baumann 2015:4-5]。ピー・クラスーを題材にした最近の作品『Inhuman Kiss』(2019)<sup>52)</sup>、『Sisters』(2019)<sup>53)</sup>はカンボジア国内でも劇場公開され、人気を集めている<sup>54)</sup>。カンボジアのアープの視覚的表象と物語がどのように受け継がれ、新たに彩られ、そして変容してきたのかをさらに考察するには、今後タイ映画作品との比較が必要である<sup>55)</sup>。

50) 東北タイではピーパオ、ピーブローンとも呼ばれる[津村 2014:184]。

51) たとえばカンボジアの『ニアン・ニャト』(2004)は、そのタイトルも「女性に対する敬称+名前」という構成になっているように、タイの『ナン・ナーク』(1999)をかなり参考していることは明らかである。前者の導入部分は壁画を通して物語の概要が紹介されるのだが、それは後者と同じである。四方田[153]によれば、後者のノンスー監督は、導入部分は、小林正樹監督『怪談』(1965)の手法を参考にしたものだという。

52) カンボジア語では「アープの恋の運命 និស្ស័យស្នេហ៍អាប」

53) カンボジア語では「アープの後継者である妹 ប្អូនស្រីពាយ័អាប」

54) タイ映画『Krasue (Demonic Beauty)』(2002)は、タイのピー・クラスーの由来はカンボジアのアンコール王朝の王女がピー・クラスーになったことにある、という設定の物語である。筆者の記憶によれば、カンボジア国内では当時、劇場公開はされていなかったが、カンボジア語日刊紙では問題視して取り上げられた。しかし政治問題にまでは発展しなかった。この作品についてはBaumann [2013, 2015]の研究がある。

55) 津村[2018]によると、タイのお化けが活発に図像化されたのは、第二次世界大戦後であるという。またタイの最初のピー・クラスー映画は『Krasue Sao』(1973)である[Baumann 2015:5]。

## 参考文献

### 日本語文献

- 東賢太朗 2011『リアリティと他者性の人類学——現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』三元社。
- 天川直子 2006「内戦が残した負の遺産」上田広美、岡田知子編著『カンボジアを知るための60章』明石書店、pp.228-232。
- 井伊誠 2008「母子の健康を脅かす？カンボジアの妖怪アープ」『トーマダー』5: 4-9。
- 上田広美 2012「14年ぶりの故郷」上田広美、岡田知子編著『カンボジアを知るための62章』明石書店、pp.250-254。
- 岡田知子 2000「忘却と記憶のはざままで」『総合文化研究』東京外国語大学総合文化研究所、No. 3: 35-40。
- 2012「人気はホラーと感動もの」上田広美、岡田知子編著『カンボジアを知るための62章』明石書店、pp.322-326。
- 2018「黄金期の映画が映し出すカンボジアの虚構と現実——リー・ブンジム『12人姉妹』(1968)に見る近現代カンボジアの諸相」山本博之編著『母の願い——混成アジア映画研究2017』、CIRAS Discussion Paper 77、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.57-71。
- 坂本恭章 2001『カンボジア語辞典』(上・中・下) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 鈴木伸和 2018「視聴覚アーキビストから見たカンボジアの映画保存——『12人姉妹』と『ノロドム・シハヌーク作品』の事例」山本博之編著『母の願い——混成アジア映画研究2017』、CIRAS Discussion Paper 77、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.72-79。
- 津村文彦 2014「ピーの信仰をめぐる複ゲーム状況論」杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学——東南アジアにおける構想と実践』風響社、pp.179-212。
- 2015『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』めこん。
- 2018「タイ映画にみるお化けの描き方」『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート、pp.162-163。
- 初鹿野直美 2012「国際社会の信頼を得るために」上田広美、岡田知子編著『カンボジアを知るための62章』明石書店、pp.216-220。
- パニユ、リティ、クリストフ・バタイユ 2014『消去

—— 虐殺を逃れた映画作家が語るクメール・ルージュの記憶と真実』中村富美子訳、現代企画室。

四方田犬彦 2009『怪奇映画天国アジア』白水社。

### 欧文献

- Ang, Chouléan. 1986. *Les êtres surnaturels dans la religion populaire khmère*. Cedoreck Paris.
- Baumann, Benjamin. 2013. “Tamnan Krasue – Constructing a Khmer Ghost for a Thai Film.” In *Kyoto Review of Southeast Asia*, (Issue 14), Young Academics Voice. <https://kyotoreview.org/issue-14/tamnan-krasue-constructing-a-khmer-ghost-for-a-thai-film/> (最終閲覧日2020年1月9日)。
- 2015. “The Khmer Witch Project: Demonizing the Khmer by Khmerizing a Demon.” In: *DORISEA Working Paper Series*, 19: 3-23.
- Khing Hoc Dy 1994. “Khmer Literature Since 1975,” In *Cambodian Culture Since 1975: Homeland and Exile*. May Ebihara, Carol Mortland and Judy Ledgerwood, eds. Ithaca, NY: Cornell University Press. 27-38.
- Kubeš, Antonín. 1982. *Kampuchea*. Orbis Press Agency :Prague.
- Ly Daravuth, Ingrid Muan. 2001. “Kon Khmer (Cambodian Cinema).” *Cultures of Independence: An introduction to Cambodian Arts and Culture in the 1950's and 1960's*. Reyum. 141-190.
- Lundberg, Anita, Lennie Geerlings. 2017. “Tropical Liminal: Urban Vampires and Other Blood-Sucking Monstrosities.” In *eTropic: electronic journal of studies in the tropics*, Vol 16, No.1, 31-45. <https://journals.jcu.edu.au/etropic/article/view/3574> (最終閲覧日2020年1月9日)。
- Porée, Guy and Éveline Maspero. 1938. *Mœurs et coutumes des Khmèrs: origines, histoire, religions, croyances, rites, evolution*, Paris: Payot. (グイ・ポレ、エヴリーヌ・マスペロ『カムボヂャ民俗誌——クメール族の慣習』大岩誠、浅見篤訳、生活社、1944年)。
- カンボジア語文献
- ក្រសួង យោសនាការនិងវប្បធម៌ 1988. *កម្ពុជាបច្ចុប្បន្ន* (『今日のカンボジア』情報文化省)
- នគរវត្ត, “សាសនាកៅយលកលយព្រះពុទ្ធសាសនា” ផ្លូវទី២លេខ៧២, ថ្ងៃសប្តាហ៍ ១៧ ធ្នូ ១៩៧៨ (『ナガラワッタ』坂本恭章、岡田知子訳、上田広美編、めこん、2019)

ប៉ែន យ៉េត ,យក់ គុណ,ជា ពន្ធក,ម៉ៅ អាយុទ្ធ 1990.  
*មហោស្រពភាពយន្ត & វង់អូ* គុណ:កម្ម  
 ការមហោស្រពភាពយន្តនិងវង់អូលើកទី១ឆ្នាំ១៩៩០  
 (パエン・エート、ヨック・クン、チア・ボンロー  
 ク、マウ・アユット『1990年 ビデオ・映画祭』  
 1990年第1回ビデオ映画祭実行委員会)

ប្រជាប្រិយ 1995. "តារាឯកកំពុងពេញនិយម ពិសិដ្ឋ  
 ពីលីកា" (「人気急上昇中の女優ピセット・ピリ  
 カ」)、No.19: 48-50.

ប្រជាប្រិយ 1998. "សិល្បករខ្មែរតវ៉ាកុំឲ្យទូរទស្សន៍ប  
 ញ្ញឹងរឿងថៃ" (プロチアプライ「カンボジア人  
 俳優たち、テレビでタイドラマを放映しない  
 ように訴える」)、No.76: 43-44.

ពៅ សាមី. 1987. *ស្វែងយល់ពិតថយមក្នុងអក្សរសិល្ប៍ខ្មែរ  
 នាសតវត្សទី ២០ តាមរយៈរឿងប្រលោមលេចធ្លោមួយចំនួន*.  
*ក្រសួងអប់រំ សាលាគរុវិជ្ជាជាន់ខ្ពស់* (パウ・サミー  
 『いくつかの際立った小説を通してみる20世  
 紀カンボジア文学の様相』教育省高等師範学  
 校).

មៀច ប៉ុណ្ណ 1999. កម្រងឯកសារ ស្តីពីប្រពៃណី និង  
 ទំនៀមទម្លាប់ខ្មែរ,ពុទ្ធសាសនាបណ្ឌិត្យ (ミアチ  
 ボン『カンボジアの伝統習慣』仏教研究所).

ហ៊ុយ វឌ្ឍនា 2020. *កន្លះសតវត្ស កន្លងផុតទៅ !*  
 (Un demi siècle plus tard by Huy Vathana)(フイ  
 ワタナ『半世紀が過ぎ去った』).

អាំង ជួលាន, ព្រាប ចាន់ម៉ារ៉ា, ស៊ុន ចាន់ដឹប. 2007.  
*ដំណើរជីវិតមនុស្សខ្មែរ: មើលតាមពិធីឆ្លងវ័  
 យ, ភ្នំពេញ: ហានុមានទេសចរណ៍* (アン・チュ  
 リアン、プリアブ・チャンマーラー、スン・チャ  
 ンドゥップ『カンボジア人の通過儀礼』吉野實  
 訳、めこん、2019年).

អនាមិក, 2003. *ពិសិដ្ឋ ពីលីការឿងពិតគួរឲ្យខ្លាចរន្ធត់*,  
 (著者不明『ピセット・ピリカ——恐ろしい真  
 実の物語』).

④不明、⑤カンボジア、⑥カンボジア語、⑦未  
 公開

『闇の影』 ① *ស្រមោលអន្ទការ*、②Shadow of  
 Darkness、③イーヴォン・ハエム (អ៊ីវ៉ង់ ហៃម、  
 Yvon Hem)、④1987、⑤カンボジア、⑥カンボ  
 ジア語、⑦未公開

『戦争のあとの美しい夕べ』①*រាត្រីមួយក្រោយសង្គ្រាម*/  
 Un soir apres la guerre、②One Evening After  
 the War、③リティ・パン ( រ៉ាយ៉ា រិទ្ធី、Rithy  
 Panh)、④1998、⑤カンボジア/フランス、  
 ⑥カンボジア語、⑦公開

映画

凡例: 邦題 ①原題、②英題、③監督、④製作年、⑤  
 製作国、⑥使用言語、⑦日本での公開。

『我が子よ、母はアープ』 ① *កូនអើយ ម្តាយអាប*、  
 ②不明、③スン・ブンリー (ស៊ុន ប៊ុន លី Sun  
 Bunly)、④1974、⑤カンボジア、⑥カンボジア  
 語、⑦未公開

『我が子よ、母はアープ』① *កូនអើយ ម្តាយអាប*、②不  
 明、③ヌット・サロン (នុត សារ៉ុន、Nuth Saron)